

# Eureka VIII

六年制通信 No.9 令和2年7月3日(金)号

## ほんとうは情熱

私たちは人の言動を毎日見えています。何となく、こんなとき彼ならこう言うだろうとか彼女ならこうするだろうとか、もうすでに周囲の人にあるイメージを持っていることでしょう。そのイメージから外れた言動をみると、彼らしくない彼女らしくないと思うわけです。そして考える。どうしてあんなことを言うのか、どうしてそんなことをするのかと。納得できる答えを探しますよね。

他人は自分とは違いますから、どのような知識を持ちどのように考えるかは日常の観察からしか理解できません。日々の言動をよく見、話をしながら理解していく。これを自分自身に対して行うのが、自分を客観的に見るということです。難しそうですね。自分は常に主体なのですから、自分の言動の理由は自分が一番よく知っているはずです。それをもう一度冷静に検証するのは、自分の弱さと向き合うことでもあるので苦痛が伴います。学習についてうまくいかない感覚があるとすれば、それはどうしてかを考えると、自分の負の部分を見つめることになります。自分が何を知っていて何を知らないかをもう一度見つめ直す力が必要なのですね。

自分に合った学習方法、英語で言うとストラテジー (strategy) ですが、これを探し出す力は自分の学習を客観的に振り返り、批判的に分析する能力に深くかかっています。これをメタ認知と言うのですが、簡単に言えば、もう一人の自分を横において観察しなさいということです。

人間は嘘をつく生き物ですから、正直であることは案外難しいものです。つついつまらない嘘をついてしまう。他愛のない嘘は英語で a white lie と行って、まあ大目に見てもらえるかもしれませんがね。しかし学習の場では「知的正直」でなくてはなりません。わからないことはわからないと、ちゃんと認識できないと成長はありませんから。人は他人に嘘をつく、そう思っているかもしれませんが、自分にも嘘をつきます。これが一番怖い。自分を客観的に見直すとき、いかに自分に正直になれるかが大切です。ですから普段から、特に学習の場では正直でなくてはならないのです。

さて、自分を客観的に分析して成長していく、自分の弱点を克服していく、それはそれで大切なことだし有効だろうと思います。でもこれは方法論です。はっきり言えば、たかが方法論です。最も大切なことはそれではありません。情熱があるかどうかです。情熱があれば継続できます。どうすればよいかと考える以上に情熱に突き動かされる継続の方が何倍も大切です。勉強で言えば、どの教科も動機づけがうまくいくと育成は可能だと言われています。それは動機づけが成功すれば情熱が生まれるから

です。情熱につながる動機は、私は「憧れ」から始まると思っています。自分もあんなふうになりたい、そう思うことが始まりです。そう思える人を見つけることが肝要です。よく見れば身近にいるかもしれないし、歴史上の人物でもいい。本の中に見つかることもあります。一人でなくても構わない。そうなりたいという思いを信じれば強い情熱と意欲が生まれます。その情熱と意欲が辛抱強さを育み、継続することを楽しめるようになります。そして知らないうちに君は自律して学ぶことを覚えます。

情熱は間違ふことを恐れませんが、間違ったら恥ずかしいという気持ちは、自分から知的正直さを奪っていきます。また、それは集団とうまく折り合うために突出したくないという思いでもあります。その気持ちは結局成長しようとする自分を大きな力で押しとどめます。学校は色んな間違いを知る場所でもあるのですから、間違いを恐れて知的正直さや情熱を失っては何にもなりません。

どうすればいいかと方法を模索する前に、自分には憧れはあるのか、情熱があるのかと問い直してみるべきではないでしょうか。

### 保護者の皆さんへ

猛暑が予想されます。そして例年なら夏休みの時期に授業をします。熱中症対策として十分に水分を持たせてください。OS-1 など経口補水液やポカリスエットも効果的だと思います。授業中の水分補給も奨励しています。塩飴を持たせていただいても結構です。授業中に舐めていたら叱りますけど。教室はクーラーがかかっているので大丈夫だと思いますが、食中毒が気になる方はお弁当に保冷剤をつけて下さい。

### 今週のおすすめ

・有川 浩 『県庁おもてなし課』 (角川文庫)

有川さんは「浩」と書いてヒロと読む女性なんですね。知りませんでした。『三匹のおっさん』なんて書いてるのでてっきり男性かと。

おもてなし課は高知県に実際に存在します。有川さんは高知県出身です。読んでいてきっとそうだろうと思いました。観光大使をお願いされたのも本当だそうで、この本の最初のエピソードも実際の話。よく「お役所仕事」と言いますが、全く遅々として進まぬ計画にイライラしたのも有川さんの実感なのでしょう。

役人の頭の固さと言いますか、時間は無限にあると思っているかのような会議と言いますか、問題があってもとりあえず先送りをしてしまう傾向と言いますか、そういったことが随所に書かれています。私は私学人ですから民間だと (つまり役人ではないと)、自分ではそう思っていますが、この本は我が身を振り返り反省するいい材料になりました。

これは、おもてなし課の若者が民間の知恵を借りながら成長していく物語でもあります。この不器用だが熱意のある青年を私は応援しながら読んでいました。また、二つの恋物語も同時に進行します。こちらもまた応援してしまったなあ。

BGMはuruのあなたがいることででした…。